ハル、今(第三圖)豆南諸島ノ配置ヲ見ルニ南微東ノ方向、御倉島、三宅島ヲ大島ト連結シ、更ニ北方箱根ニ及ブ一線ハ蓋シ富士火山帶ノ主脈ニ屬スルモノニシテ、大島ニ於テハ其ノ南々東、北々西、卽チ波浮、乳ケ崎ノ對角線ト一致シ、現今ノ三原山大噴火孔及ビ湯場ヲ始メトシ南東方波浮港爆裂口ノミナラズ岳平山、餘川、イヨノ、二子山及ビ西北方ノ愛宕山、地ノ岡山、三峯山等蓋シ皆側火山ニシテ共ニ大體此ノ一線ニ沿フテ生起セルモノト認メ得ベシ(第一圖、第二圖參照)、而シテ又南西ノ方錢島、神津島、新島、利島等ヲ繞圍スル百尋ノ等深線ヲ見ルニ明カニ南西ヨリ東北ニ延長スル海中ノ一山脈ヲ構成スルモノニシテ、大島周邊ノ百尋等深線モ著シク同島南西方ニ突出スルノ事實ニ徵スルニ錢島ヨリ利島ニ延長スル一帶ハ更ニ東北方大島ニ連ナルモノニシテ一ノ火山支帶ヲ構成スルモノナルベク大島ニ於テハ其南西、北東ノ對角線ヲ作リ、三原噴火孔及ビ泉津村地內ニアリテ側火山ナルベキ高サ各二百九十二米、三百十五米、四百十九米ナル三個ノ小丘ヲ同線ニ沿フテ生ジタルモノト見ルヲ得ベシ、而シテ此ノ火山支帶ハ南西ヨリ起リ大島ニ至リテ止マレルモノトス、卽チ大島ハ本支兩火山帶ノ分岐點ニ當レバ以テ大小噴口ヲ生ジ易カルベク、從ツテ地域ノ大ナルヲ致セルナルベシ、又南々東、北々西、竝ニ南西、北東ノ兩方向ニ火山脈ノ走向ヲ有シ島ノ兩對角線ヲ成シタル結果一種ノ四邊形トナレルモノナルガ如シ。

四　大島ノ大サニ就キテ　大島ハ其面積約五・九方里ニシテ東京市ノ面積(約四・八方里)トハ大差ナキ小島ナレドモ、大島火山ハ元來海底ヨリ隆起シタルモノニシテ其頭部ノミガ水面上ニ現ハレテ島ヲナシタルナリ、而シテ大島ヨリ南方ノ一帶卽チ伊豆七島脈ヲ除クノ外ハ四周ノ海ハ概シテ甚ダ深ク大島ト伊豆東岸トノ間ニ於ケル水深ハ六百四十五尋、島ノ北方ニテハ八百七尋乃至九百五尋ヲ示シ、又大島ノ東岸ヨリ四里半ヲ距テ、同島ト安房國南端トノ間ニテハ、水深千百十五尋ニ及ベル處アリ、(第二圖)今暫ク此ノ深床ヲ起原ノ底面トシテ算スレバ、三原山ノ高サハ約九千二百尺トナルベク、彼ノ淺間山ノ海面上ヨリノ高サ、卽チ八千百八十四尺ヨリ高キコト更ニ一千餘尺トナル、要スルニ大島ハ淺間火山ヨリモ敢テ小ナルモノニ非ズシテ、大島火口ガ島ノ面積ニ比シテハ巨大ニ過ギ、其ノ直徑ガ淺間火口ノ直徑ニ劣ラザルハ、全ク大島全般ノ山體ニ相應セルモノナルベシ。

第二章　豆南諸島ノ地震

五　火山性地震　抑火山性地震ニハ二種アリ(甲)噴火ニ伴フ

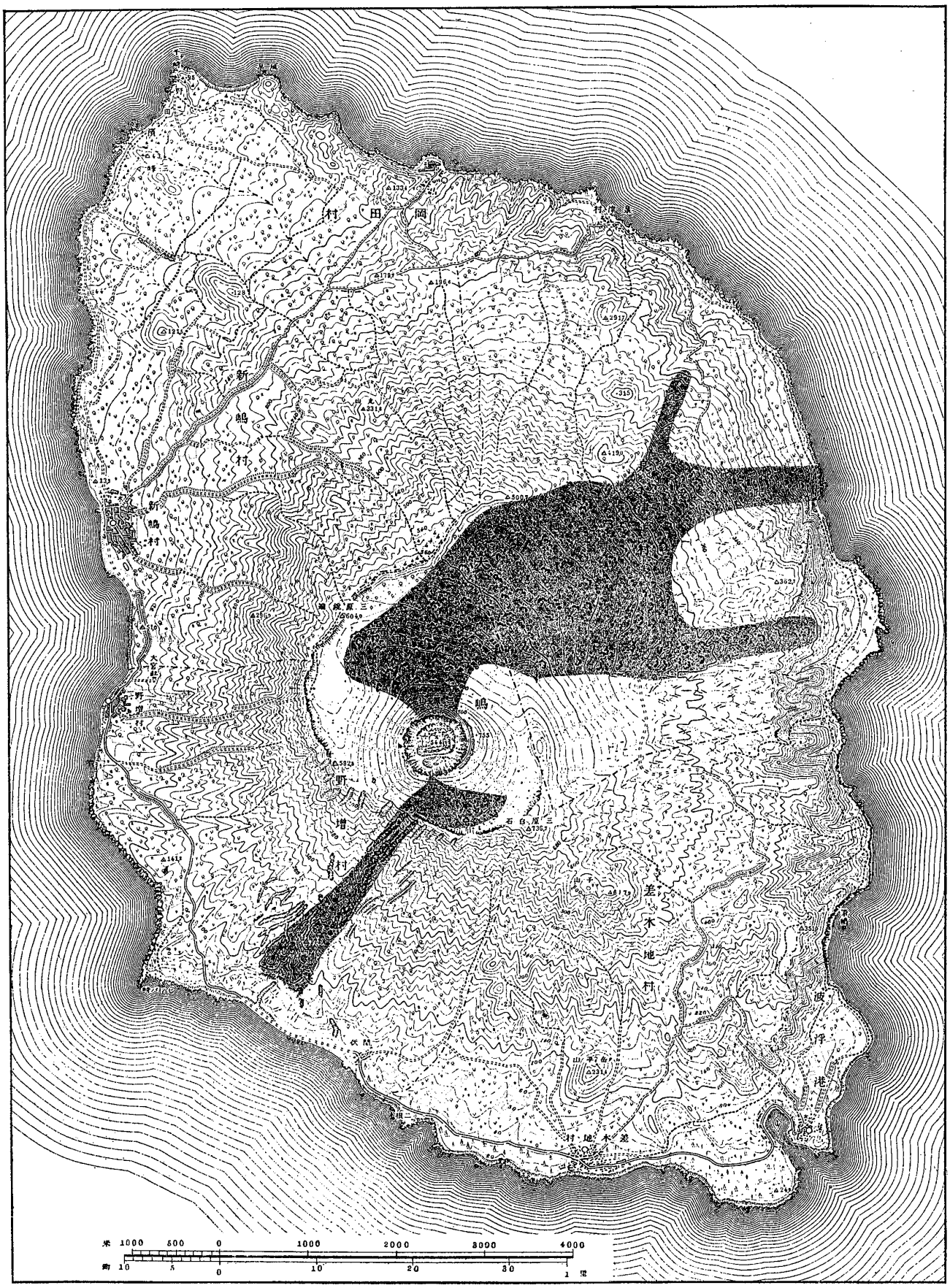
モノト、(乙)噴火ニ伴ハザルモノトアリ。(甲)ハ噴火ガ多少爆發的ナル場合ニ破裂勢力ノ一小部分ガ地響トナル結果ナレバ、其震動ハ微々タルモノニシテ、近時頻繁ニ發セル淺間山ノ强キ爆發ニテモ噴孔ヨリ半里ノ距離ニ於テハ既ニ地響キヲ感ゼザリキ。(乙)ハ噴火山下ニ蒸氣、瓦斯ガ大ナル張力ヲ積ミテ、其限ニ達スルニ及ビ地中ニ變動ヲ生ズルガ爲ニ起ルモノニシテ變動ノ勢力ハ殆ンド全然地響トナルベキヲ以テ、此種ノ火山地震ハ割合ニ强大ニシテ噴孔壁ニ裂罅ヲ生ジ、山腹ヨリ岩塊ヲ轉落シ、道路ヲ損シ、山麓ニ於テ粗造ナル土、石、煉瓦構造物ヲ破壞スルニ至ルコト敢テ稀ナラザルモ、元來火山所在地ハ地殼ノ弱線ニ沿フモノニシテ非常ナル壓力ノ積加ニ堪ヘ得ベキニ非ザルベケレバ、地下ニ甚シキ變動ヲ生ジテ巨大ナル破壞的地震ヲ發スルコト無カルベシ、卽チ火山地震ハ如何ニ强クトモ普通ノ木造日本家屋ヲ全潰セシムルガ如キコトハ無キモノトス、大島ノ如キハ同島ニ固有ナル火山地震ノ外ニ本州東方ノ海底ヨリ發スル大ナル非火山性地震ニ襲ハルヽコトアレドモ、其ノ震原地ハ大島ノ直接附近ニ存スルニ非ズ、且ツ同島ノ基礎ハ堅キ岩石ヨリ成ルモノナレバ、震動ガ極端ニ激シキニ至ラザルベク、震害ハ道路石垣ノ損ジ等ニ止マルベキナリ。

六　元祿十六年ノ地震　東海道ノ海底、房總半島外側沖ヨリ大震ヲ發スルトキハ大島ノ海岸ハ多少津浪ニ襲ハルヽコトアルベシ、波浮ノ如キモ元ハ一個ノ火山湖ナリシガ元祿十六年十一月廿三日ニ江戸、小田原ノ大震アリ、震原ガ海底ニアリシヲ以テ津浪ヲ伴ヒ起セリ、爲ニ岡田村同船漁船十八艘、男女五十六人、人家五十八軒流失シ、波浮池決潰セラレテ海ト連ナリシガ、其ノ後、秋廣氏ノ祖先工事ヲ加ヘテ船ヲシテ出入シ得ベカラシムルニ至レリ。

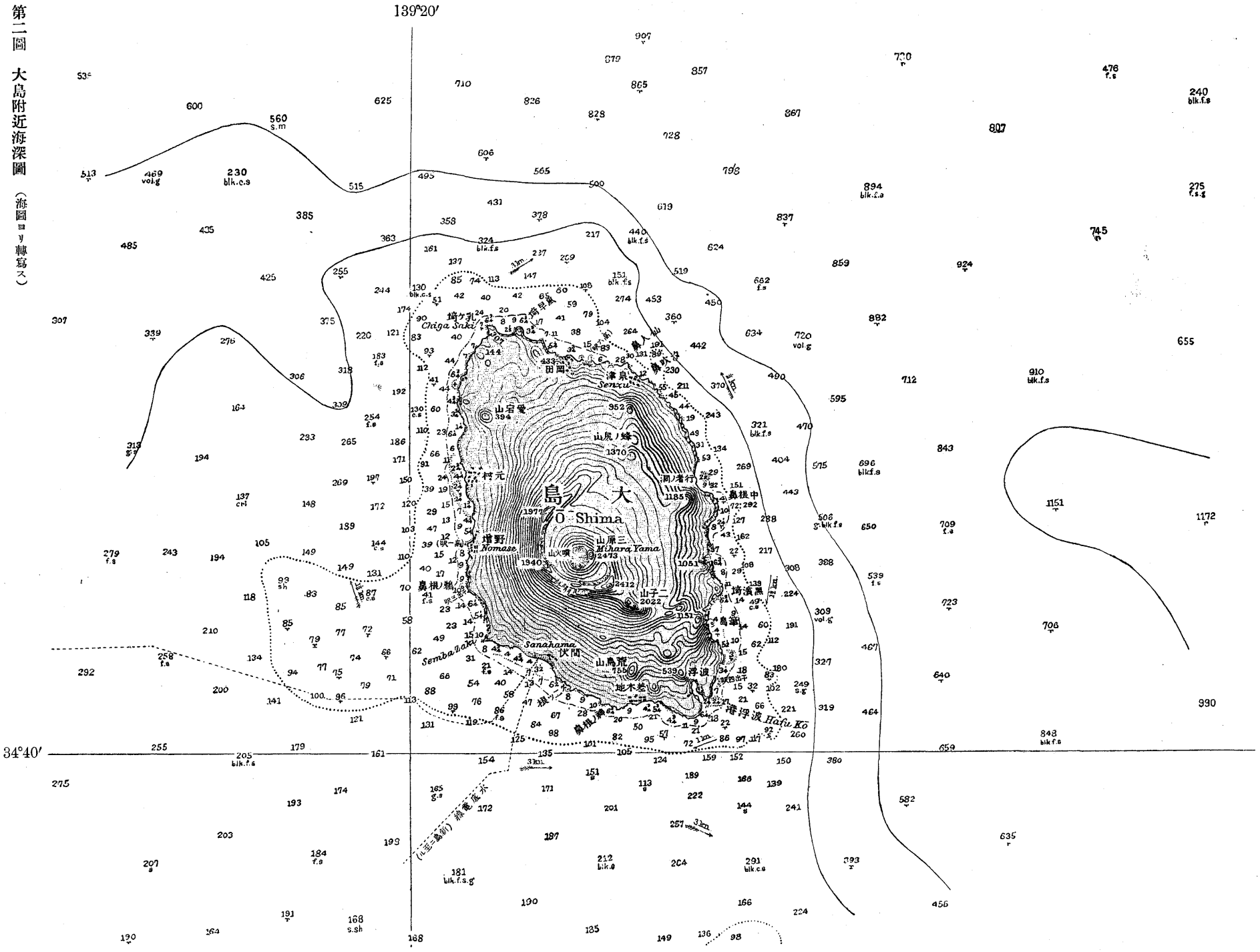
次ニ近時ノ豆南諸島强震、卽チ明治二十三年ノ三宅島、新島ノ地震、同三十三年ノ御藏島、三宅島近海ノ地震、同三十八年及ビ四十二年ノ大島兩回地震ニ就キテ述ブベシ。

七　明治二十三年四月十六日午後九時半頃三宅島、新島ノ激震　有感震動區域ノ陸地面積ハ四千七百方里ニシテ、就中强震區域ハ伊豆全國、駿河東方、相模南部、武藏南一分、上總南西四分、安房全國ニシテ其面積二百九十方里ニ達セリ、而シテ震動ノ最モ激シカリシハ三宅島及ビ新島ニシテ、左ニ記載スル地震報告ハ御倉島ノ人栗木俊太ナル者所用アリテ四月四日三宅島ニ渡リ同島ニ滯在中十六日ノ地震ニ出合ヒタル時ノ實況ヲ地理局員大塚信豐ガ同人ヨリ聞キ得タル所ヲ記載スルモノナリ、三宅島ハ神著村、伊豆村、阿古村、坪田村、伊ケ谷村ノ五村ニ分レ人家合セテ凡ソ一千戸ヲ有ス。

第一圖　大島地圖（陸地測量部五萬分一圖ヨリ縮寫）



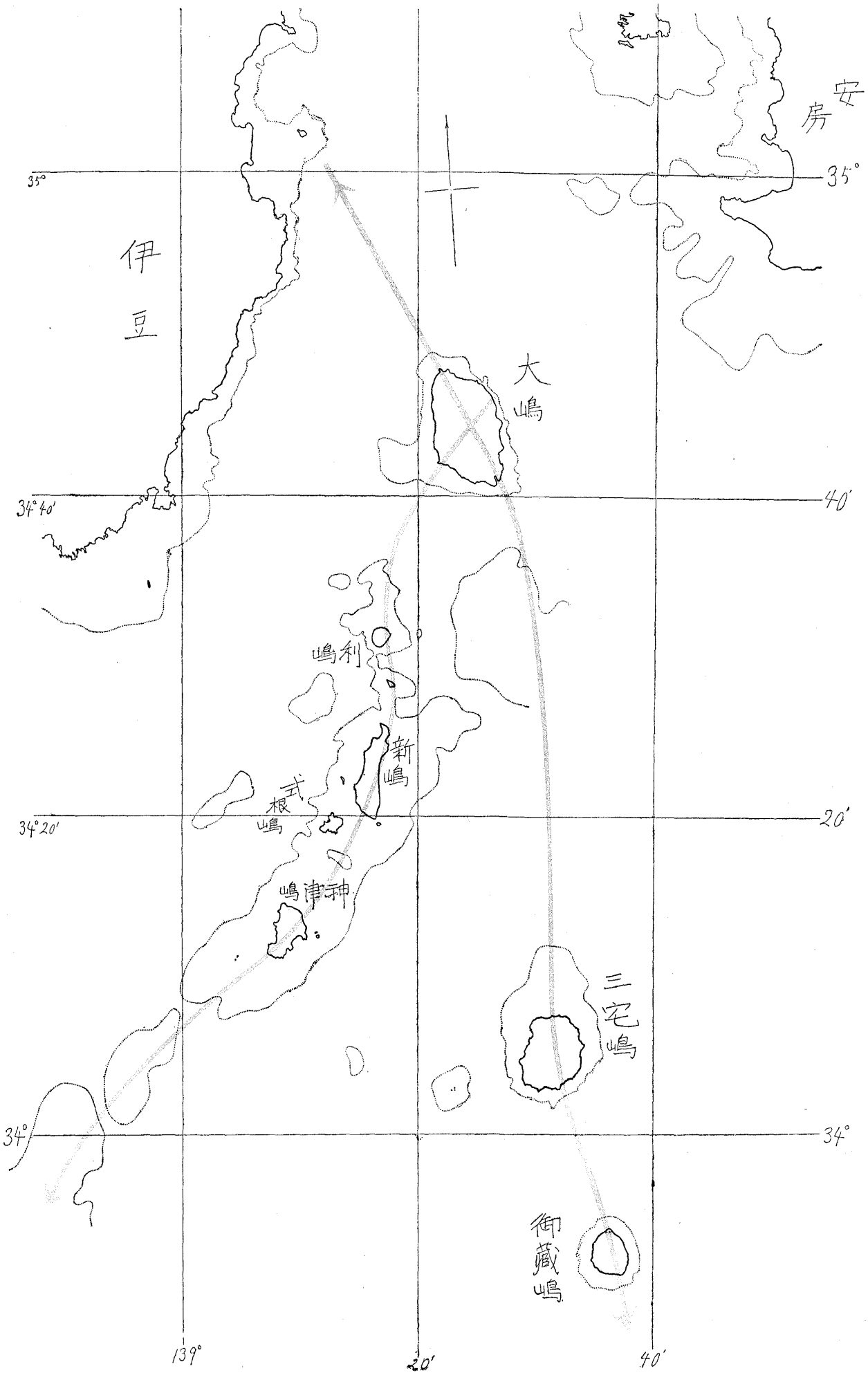
赤ク着色セルハ永安大火噴ノ際ニ流出セル岩鎔ノ概區域ナリ



第二圖　大島附近海深圖（海圖ヨリ轉寫ス）

數字ハ海深ヲ尋ニテ示ス

點線ハ百尋、十尋ノ等深線ニシテ大島ノ東方ヨリ西北ニ亘リテ畫セル實線ノ二條ハ五百尋及ビ三百尋ノ等深線又東方沖ノ一曲線ハ千尋ノ等深線ナリ



第三圖　豆南諸島略圖　海深ト島列トヲ示ス

海中ノ點線ハ百尋ノ等深線

赤線ハ島列卽チ海中山脈ノ走向（矢ハ其ノ方向ニ續クヲ示ス）

三宅島地震ノ實況　四月十六日午後九時半過西方ヨリ百雷ノ如キ響ノ達スルト共ニ發震シ上下左右前後ニ震ヒシカバ人々狼狽シテ戸外ニ逃ゲ出ス此時家屋震動最モ烈シク戸障子ノ如キハ溝ヲ脱シテ顚仆シタルモノ尠ナカラズ又棚上ノ器物ハ概シテ顚倒或ハ墜落シ其響鳴リ渡リテ人々恐怖シ一人トシテ屋内ニ居ル者ナカリキ爐ノ如キモ地面ヨリ突キ上ゲラレ床上ニ突出シタル所アリ此間凡ソ三分時間ニシテ止ム前震ニ引キ續キ輕震スルコト數十回殆ド毎十分間ニ地震シ今ニモ復タ大震ノ來ラントスル有樣ナルヲ以テ毎戸共ニ一族相集リ專ラ震災ヲ避クルノ用意ヲ爲シ夜半過ニ至ルモ一人トシテ睡眠スル者無ク又前述ノ如ク輕震頻リナル内ニ午前一時頃ニ一回稍强キ地震アリ是レゾ大地震ナラントテ急遽戸外ニ遁出シタリシガ暫時ニシテ靜ヅマリ又々屋内ニ入リシモ神佛ヲ祈ル者モ少ナカラズ島役場ヨリ急達シ屋内ニ火氣ヲ禁ジ爐ノ如キハ悉皆水ヲ撒布シテ火ヲ消シ壯者ハ所在各家ヲ巡回シテ火ノ元ニ注意シ其騷動容易ナラズ而シテ地震ハ尙止マズシテ輕震連續シ午前六時ニ至リ更ニ强震アリ此時栗木止宿ノ臺所ニテ飯ヲ炊カントセル際ナレバ愈〻恐怖シ十七日ハ朝餉モ食スルコト能ハズシテ避難一方ニ注意シタリ然ルニ漸ク地震モ減退シテ二三十分間若クハ一時間置キ位ニ輕震スルガ如ク遠ザカリタルヲ以テ朝餉ヲ喫スルニ至レリ因テ人々業ヲ止メ專ラ避難ノ計ヲ爲セリ十八日ニハ地震ノ數大ニ減ジタルモ尙二時間毎ニ震動アリキ此地震ノ爲ニ損害ヲ及ボシタル所尠ナカラザルベシ現在目擊シタル概況ニ由リテ見ルモ三宅島北方海岸ノ崩レタル處實ニ少ナカラズ就中其最モ著シキ處ハ神津村大久保濱ト稱スル所崩潰シテ道路ヲ埋メ通行ヲ止メタリ其他同村内ハ勿論諸村落ニ通ズル道路ノ崩レタル所許多アリ大地ハ諸所ニ罅裂ヲ生ジ而シテ伊ケ谷村高松山麓ニ生ジタル罅裂ハ南北ニ向ヒタリ又島ノ西方ニ面シタル小山崩落シテ一戸ヲ潰シタリ幸ニ空屋ナリシヲ以テ死傷ナカリキ伊谷村ハ谿谷ニ在ルヲ以テ山峯ノ崩潰シ來タランコトヲ恐レ最初ノ大震後ハ一村大概他ヘ轉ジテ住居スル者ナカリシト云フ古老曰ク此島ハ一年平均一二回ノ微震ニ止リ今回ノ如キ大地震ニハ八十年來始メテ出合タリト尤モ昨年四月下旬頃可ナリノ强震アリキ栗木ノ想像ニ家屋ノ構造若シ内地ノ農家ノ如キ粗造ナルモノナレバ必ラズ多少ノ損潰ヲ來タスベカリシモ此島ニ於テハ家屋堅固ニシテ柱ノ如キモ内地普通ノ柱ノ太サニ四倍スル程ニ丈夫ナルモノヲ用ヒタレバ幸ニシテ震災ヲ免カレタルナランカト三宅島ハ有名ナル火山ニシテ現ニ明治

七年ニ噴火セシ例モアレバ島民一般今回モ亦噴火ノ災ヲ被ランコトヲ恐レ居ルト云フ又此島ニテハ噴火ノ前兆ハ大島ノ噴煙止ルヲ例トスト言ヒ頻リニ大島ヲ遠望スルモ折惡シク細雨濃霧其周圍ヲ蔽鎖シ爲ニ痛心殊ニ甚シク業務ニ就ク者一人モナカリキ一說ニハ伊豆大島ノ噴火ハ六十年毎ニ發スルヲ例トスト云フ。

以上神津村ニ於テ自ラ目擊又ハ傳聞シタル所ニシテ輕震ノ數回アリタル爲メ人々大震ノ再發ヲ恐レ他村等ヘ通行セザルヲ以テ詳細ノ調査ヲ爲スニ於テハ被害等蓋シ尠ナカラザルベシ十九日三宅島ヲ出發シテ東京ニ出張ス此際ハ地震ノ數モ減ジ僅ニ一日四五回ノ輕震ニシテ大震ナカリシヲ以テ人々漸ク安堵シ各其業ヲ執ルニ至リタリ。

新島ノ模樣ヲ聞クニ同島モ同時ニ地震シ三宅島ヨリ一層震動强烈ニシテ石塔ノ如キハ大概轉伏シ土藏モ潰レタル所アリト云フ因テ現場ニ臨ミ調査セバ其被害三宅島ヨリ更ニ大ナルモ知ルベカラズ又御倉島モ同樣大震シタリト云フ然レドモ未ダ交通セザルヲ以テ前二島ノ景況ハ詳カナラズ。

八　明治三十三年十一月五日午後四時四十二分御藏島、三宅島近海ノ地震　三宅島及御藏島ニ損害ヲ與ヘタル激震ニシテ有感區域ノ陸地面積中「弱震」部ハ一千一百九十方里ニ達セリ「强震」部ハ伊豆列島竝ニ安房全部、上總南西五分、伊豆南東六分相模南二分ニシテ面積三百方里アリ」三宅島ニテハ四日午前八時頃ヨリ既ニ「前キ搖レ」ヲ感ジタリシガ五日午後四時四十分頃南東ノ方向ヨリ激震ヲ發シ家屋ノ損害アリ、石垣等崩壞甚シク、道路ハ處々缺壞ヲ生ジ、殊ニ伊ケ谷村字板崎濱ニテハ海岸ニ於テ幅六間、奥行四間程ノ個所崩壞シ、阿古村字東山海岸ニ於テハ岩石ノ墜落アリ爲メニ石垣六ケ所ヲ破壞セリ、又同村ヨリ坪田村ニ通ズル道路二ケ所ニハ大ナル龜裂アリ、其一ハ延長二十間ニシテ幅一尺五寸、他ハ延長三間ニシテ幅約五寸アリ、尙ホ坪田村ニテハ石垣ノ破損四ケ所ニシテ地面ノ小龜裂ハ數十箇所ニ及ベリ、但シ墓石ノ顚倒セルモノ無ク、家屋ノ損害ハ一モ有ラザリキ。御藏島ニテハ屋内ノ器物ハ概ネ倒伏シ地面ハ處々龜裂ヲ生ジ延長六七間ニ及ベルモノ數ケ所アリ海岸一體ノ地ハ大ナル崩壞ヲナシ船著場ノ如キハ爲メニ物置小屋三棟船舶二艘ヲ破壞セラレ、道路ハ處々塡塞シテ通行ヲ杜絶セラルヽニ至リ石碑、石燈籠類ノ顚倒夥シカリシモ幸ニ他ニ家屋ノ倒潰ハ無カリキ、然レドモ山腹ヨリ岩石墜落シ來リタル爲メ負傷シタルモノ一名アリ海岸ノ崩壞ハ總數百二十餘ケ所ナリシガ其最大ナルハ西北面ニアリテ幅二町ニ及ベリ、又海岸ニ通ズル六個ノ道路ハ全ク破壞セラレタリ。神津島

ニテハ棚上ノ器物墜落シ陶器ノ破損夥シカリシガ石碑六十餘基ハ何レモ南西ニ向ツテ倒レタリ、字河原ニテハ崖ノ崩壞セシモノ長サ五間幅一間半アリ、又字「ダヾヌケ」ノ隧道二間餘モ缺潰シテ水道土管ノ破裂セルモノ一ケ所アリ、其他地面ノ龜裂ハ幅一寸位ノモノ數多アリ、家屋ノ全潰二、半潰三戸ニシテ破損寡ナカラザリキ。

要スルニ三宅島ハ御藏島ニ比シテ震害甚ダ少ナク、神津島ノ震動ハ三宅島ニ比スレバ稍〻强カリシモ、御藏島ニ比スベキモノニハ非ズ、福地理學士ノ調査ニヨルニ震原地ハ略ボ錢島ト藺灘波島トノ中間ナルモノヽ如シ。餘震ハ頗ル夥ク翌年四月迄モ發生ヲ續ケタリ。

九　明治三十八年六月五日及ビ七日ノ大島地震　夥多ノ前震アリテ五月二十八日頃ヨリ既ニ大島ニテハ地震ヲ感ジタリト云フ、第一回ノ激震ハ六月五日午前一時四十五分頃ニシテ、第二回ノ激震ハ大島ニテハ第一回ヨリモ一層ノ激シサヲ加ヘ七日午後二時三十九分頃ニ發シタリ、損害ノ多クハ此時ニ關セルモノトス、爾後日々多少ノ餘震アリ、六月十五日頃迄繼續セリ。七日ノ激震ニ於ケル有感區域ノ陸地面積ハ三千四百七十方里ニシテ、就中强震區域ハ伊豆、相模、安房ノ海岸ノ一部ト大島全部ヲ含ミ陸地面積五百十方里ニ達セリ、大島ニ於テハ最激ニシテ石垣ノ崩壞、地面ノ龜裂等ヲ生ジタリ。大島村中震害ノ最多ナリシハ元村ニシテ、野增村之ニ次ギ、泉津村ハ損害稍々少ナク、岡田、差木地、波浮ノ三村ハ損害皆無ナリ、島内ノ損害ヲ次ニ表示ス。

明治三十八年六月五日乃至九日地震ノ損害

震害＼村名	元村	岡田	泉津	野增	差木地	波浮
破損家屋	—	—	—	三	—	—
道路崩壞	一四八ケ所	—	二五	一〇	—	—
同龜裂	二ケ所	—	—	—	—	—
石垣一部崩壞	四三五ケ所	—	三	一四	—	—
土地崩壞	一ケ所	—	—	五	—	—
同龜裂	一四ケ所	—	一〇	八	—	—
井戸龜裂	一個	—	—	八	—	—
器物破壞	一圓	—	—	八五	—	—

（本表ノ外小破損多シ）

一〇　明治四十二年一月十六日午後四時五十七分頃ノ大島强震　震域ハ長徑二百里短徑五十里ニシテ、陸地面積六千五百九十方里ニ達ス、就中有感覺部ハ千四百四十方里ニシテ震原ハ大島ノ南方海底ニ存在セシモノヽ如ク伊豆ノ東岸及ビ安房ノ南端ニ於テモ强震ヲ感ジタリ、今回ハ大島ニ於テハ五回ノ餘震ヲ感ジタルノミナルモ主震ハ却テ强烈ニシテ同島差木地

村及ビ波浮港ニ於テハ地面ニ龜裂ヲ生ジタル個處アリ、又伊豆及ビ安房ノ海岸ニ於テハ振子時計ノ運轉ヲ停止シ震動甚ダ强カリシモ格別ノ損害ハナカリキ、八丈島ニテノ觀測ニ依レバ地震動緩慢ニシテ初期微動十七秒五ヲ示セリ。

一一、摘要　前記四回ノ豆南激震ハ何レモ東京帝國大學構内据ヘ付ケノ微動計ニヨリテ記錄セラレタルガ、振動ハ頗ル大ニシテ數時間ニ亘リテ繼續シ各地震トモ顯著ナル大變動タリシヲ示セリ、今マ此等ノ最大實動ヲ示セバ左ノ如シ。

番號	地震（明治）	震原、東京間ノ距離	最大東西動（略ボ横波ニ當ル）	最大南北動（略ボ縱波ニ當ル）
2	三年三月一日	一九三キロメートル	一六ミリメートル（以上）	一三ミリメートル（以上）
3	三八六七	一二五	七、〇	七、七
4	四二一一六	一二五	五、一	三、七

今マ南北動卽チ縱動ニ相當スル分ニ就キテ比較スルニ(2)ハ最大ニシテ(4)ハ最小ナリ、(2)(3)(4)ノ大サハ殆ド四ト二ト一トノ比ニアリ、(1)三宅島近海ノ地震ニ關シテハ當時微動計ノ裝置無カリシト雖ドモ、東京大學(一ツ橋外)ニ於ケル「ユーキング」式普通地震計ガ大ナル波動ヲ畫キタルヲ以テ見レバ該地震ハ頗ル大ナリシニハ相違ナク、蓋シ(2)ト伯仲セルモノナラント考ヘラル。比較ノ爲メ淺間山竝ニ櫻島激震ノ東京及ビ大阪ニ於ケル微動計觀測ノ結果ヲ示セバ左ノ如シ、但シ淺間地震ニ關シテハ東京ニ於ケル東西動ハ南北動ヨリ少シク縱波ニ近ク、大阪ニ於テハ東西動ハ略ボ縱波ニ當ル、又櫻島地震ニ關シテハ東京及ビ大阪トモ東西動ノ方縱波ニ近シ。

	地震	東京觀測 震源ヨリノ距離	東京觀測 最大東西動	東京觀測 最大南北動	大阪觀測 震原ヨリノ距離	大阪觀測 最大東西動	大阪觀測 最大南北動
イ	明治四一年五月二六日 淺間山地震	一三七キロメートル	一・九七ミリメートル	二・五五ミリメートル	三三〇キロメートル	〇・四一ミリメートル	——
ロ	同 四五年七月一六日 上	同	一・七七	二・五五	三三〇	〇・八七	〇・八四
ハ	大正三年一月一三日 櫻島地震	九五八	二・七	一・五三	五六〇	八・二	七・五

任意一地點ニ於ケル震動ノ大サ、卽チ重振幅(2a「ミリメートル」トス)ハ概略地震全體ノ大サ(Mトス)ニ比例シ、震原ヨリノ距離(R「キロメートル」トス)ニ反比例スベケレバ一地震ノ大サ(M)ハ2a×Rナル數ニヨリテ示サルベキコト、ナル、卽チ M=k×2aRトスレバkハ定數ナリトス、今東京觀測ニヨリテ M/k ナル數、卽チ2aRヲ計算スルニ左ノ如シ。

地震		東京觀測 縱波	東京觀測 横波	大阪觀測 縱波	大阪觀測 横波
豆南地震	(2)	二五〇〇（以上）	三一〇〇（以上）	——	——
	(3)	九六〇	八七〇	——	——
	(4)	四六〇	六四〇	——	——

淺間地震 (イ)	淺間地震 (ロ)	櫻島地震 (ハ)
二七〇	三五〇	二八〇〇
二八〇	三五〇	二四〇
—	〇二九	一五〇〇
—	四六〇〇	四二〇〇

實際ニ於テハ全振幅(2a)ハ震原距離ノ反比例ヨリモ一層急速ニ減少スルコトモ有ルベク、從ツテ(ハ)櫻島地震ノ場合ノ如ク東京大阪兩地ノ觀測ヨリ算出セルM/kナル數、卽チ地震全體ノ大サニ比例スト見做スベキ數ガ一致セザルコトアルモ、要スルニ(3)及ビ(4)ナル大島近海ヨリ發セル地震ハ殆ド淺間地震(イ)及ビ(ロ)ノ三倍若クハ二倍ノ大サニ相當シ、(2)明治三十三年ノ三宅島附近ノ地震ハ更ニ大ニシテ(ハ)櫻島地震ト伯仲ノ間ニアリ、卽チ此ノ程度ノ大震ガ南九州若クハ富士帶ノ如キ活動盛ナル火山脈ニ沿ヒテ時々發起シ得ルヲ示スモノトス。

第三章　豆南諸島噴火ノ歷史

一　伊豆諸島噴火ノ古記

大島三原山ハ淺間、阿蘇等ト共ニ本邦著名ノ火山ニシテ其ノ三原ナル名稱(八丈島ニモ三原山アリ)ハ噴孔ヲ御洞(ホラ)ト稱セルヨリ轉訛セルモノナルベキカ、今ヨリ千二百三十一年前、卽チ天武天皇十二年十月十四日土佐國ニテ田苑五十餘萬頃ヲ陷沒セル大地震ノ夕、鳴聲ガ東方ニ於テ聞コヘタルハ伊豆大島ノ噴火ニ關スルモノナラントノ說アリシ趣ヲ日本紀ニ記ルサレタリ、要スルニ三原山ハ往古ヨリ盛ナル破裂ヲナセルヲ以テ大島ノ名ハ當時ニ在ツテモ人ノ能ク知ル所トナリ、土佐大地震ニ際シ大島ヲ連想セルモノナランカ。

村岡博士著日本地理志料ニ大島、波布比咩命神社、在波布(今ノ波浮)港。曰波布ノ太后大明神。阿治古神社在野增村。曰總鎭守大宮明神。波治神社在泉津村。曰波治竈明神(葉字釜ニモ作ル)竝波布比咩神ノ所生トアリ、又神津島、阿波神社在此。曰長濱明神、祀三島神ノ元妃阿波咩命、物忌奈命神社、稱定明神(サダメ)爲一島總鎭守。卽阿波咩命ノ所生也トアリ、後記セル承和五年大噴火ニ關スル續日本後記ノ文ニ據ルニ同噴火ハ大島ニハ非ズシテ神津嶋ノ破裂ナルコト疑無シト思ハル。六國史中ニ載セラレタル伊豆大島若クハ他ノ豆南諸島ニ關スト思ハル、噴火ノ記事幷ニ他ノ多少參照トナルベキ記事ヲ左ニ鈔出ス。

(一)天武天皇八年二月癸亥(十八日)(西曆六百八十年三月二十六日)如鼓音聞于東方。(日本書記)

(一′)天武天皇八年六月辛亥(八日)(西曆六百八十年七月十二日)灰零。(日本書記)

(二)天武天皇十二年冬十月壬辰(十四日)(西曆六百八十四年十一月二十九日)逮于人定大地震、擧國男女叫唱、不知東西、則山